

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

II 特別連載 II

第297回

新型コロナウイルスの感染拡大による影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構（JST）では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は九州工業大学と昭和女子大学が実施したオンラインプログラムについて紹介する。

九州工業大学の活動報告



大田 真彦
(九州工業大学
教養教育院准教授)

3か国・地域連携による
オンライン国際共修

九州工業大学は、昨年10月26日から11月25日にかけて、国立台湾師範大学およびマレーシア・プトラ大学と共同で「サステイナビリティー・アクションに関するトランスローカル・ピアラーニング」日本、台湾、およびマレーシアのオンライン連携」と題したオンライン国際共修を実施しました。3か国・地域（国籍では8か国・地域）から合計24名の学生がプログラムを修了しました。



集合写真

本プログラムでは、持続可能性に関する知識を提供するだけでなく、異なる地理的、社会的、および文化的背景を有する参加者が、チームとなって、あるローカルな事象について学び、お互いの

1	オリエンテーション
2	【北九州市（日本）】 公害克服の経験と行政・企業・市民間のパートナーシップ 大田真彦（九州工業大学 准教授）
3	【国東半島・宇佐地域（日本）】 日本の農村地域の活性化のための教育プログラム：国東半島・宇佐地域の世界農業遺産の事例 林浩昭（国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会 会長）
4	【上勝町（日本）】 日本のゼロウェイストビレッジ Linda DingおよびKana Watando（INOW Kamikatsu共同創設者）
5	【台北（台湾）】 政治的視点からの都市部での気候レジリエンスの再考：台北市の社子地域の事例 Mucahid Mustafa Bayrak（国立台湾師範大学 助教）
6	【クランパレー（マレーシア）】 河川管理のための市民科学プロジェクト Mohd Yusoff Ishak（マレーシア・プトラ大学 准教授）
7	参加者による最終プレゼンテーション

理解や認識を確認しあい、最終的に何かしらの提案を協働で作りに上げるといふ、ピアラーニングのプロセスを重視しました。参加学生は、初回オリエンテーション時に、4〜5名からなる混合グループを5つ形成しました。そして、毎回のレクチャーの後、設定されたテーマについて、グループメンバー間で日程調整の上、ディスカッションを行いました。Stackをプラットフォームとして用い、自分の考えの共有・ピアコメントや日程調整などに活用しました。

同期的に集まったのは、右表の7回になります。レクチャーは全5回で、様々なテーマとローカリティを含むように設計しました。レクチャーはZoomで実施しました。

グループディスカッションでは、レクチャーの内容を自分の出身地や現在の居住地の状況と比較し、応用可能性を検討するなどのやりとりが見られました。また、最終プレゼンテーションでは、各グループが5つのレクチャーのテーマから1つに着目し、改善点やア



昭和女子大学学生との交流



グループワークを行う参加者

パンデミック下においては、留学や海外旅行の機会が激減していますが、オンラインプログラムを活用することで、普段は出会えない国の学生と気軽に交流する得難い機会となったのではないかと考えています。

立大学からは2つのカレッジ(シエルブツエカレッジ、ジゲメナムゲル工科大学)の学生・教員あわせて25名が、みな民族衣装に身を包み、オリエンテーションに参加してくれました。その後、現代教養学科の有志学生6

名がおよそひと月かけて準備してきた、「四季を巡る日本のバーチャルツアー」と「日本人女子大生の一日に密着Vlog」の2つのプレゼンテーションが行われ、和やかな雰囲気です。10月21日、25日には、それぞれ特別講義と国際ワークショップが開催されました。特別講義は、現代教養学科の小川豊武先生から、学科の特色であるプロジェクト活動と、それを学びにつなげるためのPBL(Project Based Learning)について、丁寧な説明をしていただきました。国際ワークショップは、外部講師として栗生はるかさん(一般社団法人せんとうとまち代表理事/文京建築会ユース代表)をお招きし、「まちのアイデンティティを継承するということ」と題して、東京下町の銭湯をテーマとした伝統文化の継承などに関する研究・実践の内容をお話しいただきました。また、その後は、同テーマについて、日本とブータンの学生を交えたワークショップが行われました。続く10月28日には、ブータンの学生たちに、PBL科目の一つである「プロジェクト・ファシリテーション」に挑戦していただきました。1グループ3〜4名ずつに分かれ、身近なコミュニティの将来像を描き、それを実現するためのプロジェクトを立案するプロセスを体験していただきました。最終日となった11月3日は、ブータンの学生たちから今回のプログラムの成果となる最終発表をもらった後、異文化交流会と題して、昭和女子大学の学生約15名が参加して日本とブータン、双方の文化について紹介し学び合うセッションが開かれました。日本の学生たちは、デザイン性や機能性に優れた日本の文房具の紹介や、激辛と噂のブータン料理に日本人が挑戦する動画など、初日同様に入念な準備をして当日に臨みました。双方の学生にとつて、国境と言語の壁を越えて繋がりがあうことのできた、充実した時間となりました。

昭和女子大学現代教養学科では、昨年10月18日から11月3日までの間に週2日程度の頻度で計5日間、ブータン王立大学との国際交流プログラムをオンライン開催しました。このプログラムは、科学技術振興機構(JST)による、日本と海外の学生や若手研究者の交流を促進するための事業「さくらサイエンスプログラム」の一環として行われたものです。初日となった10月18日はまず、現代教養学科の学科長であるシム・チュン・キャット先生の開会挨拶で幕を開けました。ブータン王

藤原 整
(昭和女子大学
現代教養学科特命講師)

昭和女子大学の活動報告

アイデアを発表しました。様々な地域の具体的なローカルアクションについて学び、また3か国以上の多文化チームを形成しディスカッションをするという経験は参加者に大きな意義があったようです。他方で、グループとしての一体感の形成や、批判的視点を含んだ活発な議論という観点からは、オンラインであるがゆえの難しさもあつたようです。

オンラインでの学びは、空間および時間を飛び越えるという利点がありますが、実際に現場を訪れること、人と対面することによってしか得られないものもあります。今後の展開として、COVID-19が終息した暁には、オンラインと組み合わせる形で、対面でのフィールドワークも含んだプログラムの実施に繋がりたいと考えています。